学問所読

抜選

四

和書門
類 四二三〇一
號 三九
函 二
架 一七
冊

内閣文庫
和書
類
號 三三〇一
冊 一七
函 一七〇
架 八

第

内閣文庫
番號 和 42301
冊數 17（16）
函號 170 49

国立公文書館
National Archives of Japan

常山紀談拾遺巻四目次

一岐阜攻の時川々洪水ふとゝ後藤又兵衛尋問の事
一家康公慶長五年七月會津御発向の事
一秀吉尾羽進発の事
一朝鮮陣中加藤清正馬の糠下知の事
一秀忠公秀ノカハ田原御狩の事
一細川家鉄炮口薬入の事
一秀吉岐阜攻の事
一源君久世三四郎坂部三十郎（物見仰付らゝ事
一豊前国紀伊谷紀伊弥三郎篭城の事
一清正の士腰兵粮を持どゝて不奥の事

浅草文庫

一直江山城守伊達弾正忠加勢を乞事
一赤井悠右衛門武勇の事
一源君長久手御馬揃の事
一大阪夏御陣真田左衛門佐幸村勇戦の事
一同時木村長門守敗北の事
一同冬御陣越前忠直卿の手仕寄の事
一信玄の士小幡豊後物見の事
一嶋原一揆の時寺沢兵庫頭知計の事
一源君御鹿従中根左源太勘氣御免の事
一嶋原一揆の時紀伊頼宣卿明知の事
一大阪陣渡辺図書即知の事

一島原攻並河九兵衛足軽下知の事
一伴助右衛門水戸家へ召抱らるゝ事
一島原落城足軽陣佐左衛門手柄の事
一松山新助の勇将中村新兵衛ゞ事
一大阪攻の時平野村失火安藤治右衛門遅参の事
一城和泉守長盛讒言の事

四目二

常山紀談拾遺巻之四

備藩　湯淺　元禎　述
同男　明善　校

○関が原御陣前々福島正則池田輝政外大名十二頭ふて岐阜の城を攻る黒田長政田中兵部少輔藤堂高虎桑山伊賀守戸川肥後等い大山押ふ居る岐阜を攻る最中ふ大山の城明のき俵ふ付長政高虎何も岐阜へ推つめ俵内岐阜落城ゑ長政高虎等残念ゑ思つる所へ岐阜後詰〻〻大垣より石田三成島津義弘小西行長二万餘アりて江土川迄押來る長政吉政高虎桑山土川等幸と悦江戸川へ馳向ひ大垣勢漫々と川向ふ備へ〻〻八月雨の洪水増て瀬扰

打て流を駈く水事々出る何まも香ゞ島村の杣の辻よ集
ま五人の大将ハ床几よ腰をかけて居る家老功者ども を
集て談合さる川をこゝ合戦利ゆるべきゝ又あさず
ゝて利有べきゝ勝負の所談合ふされを移をされども一
決せざるそれよ後藤又兵衛政次頭形の甲ふ孔雀の引廻
しふ五尺つ出さる銀の天衝のつり立物ゝ黒母衣かけ
るゞ遠々ふ畏居る高虎申されゝ後ハゆまよ罷ゆる銀の
天衝ハ黒田殿御内後藤又兵衛とゝ呼寄かまゞ了
簡を尋聞んとゆり長政の曰皆歴々寄て埒ゆるゞふ談合
を何ゝゝ又兵衛了簡仕べきやと謙退ゝり高虎左様ゝゝ
あまなゝ後又兵衛ハゝびゝるゝを申者ゝて後ゝて解

ゆゝ召まを後つゞ又兵衛黒母衣中ゝかけ叅り畏り後藤
堂申ゝまを後ゝゝふ又兵衛此川を渡ゝゝて利有べきゝ
川を前ふ當渡らゞゝゝて利ゆるべきゝ先程より相談極
まゝゝゝゞ汝了簡を尋る所なり川を渡ゝゝゝゝず勝負
いゝんと有又兵衛ゆゝゝと笑ひ先程よりゆまゆて承
り後憚ゆゞゝ各様ゝゝハ御相談所ゝゝハ不存後ゝゝ子
細ハ今昼ゆゝゝ御坐後て岐阜の手ハ御あひ不被成何を
以ゝ内府へ仰立らまふ成ゝれ後ゝんや爰ゆて御一戦ゆ
ゝまゝずゞ恐なゞゝ各様男と成申まゞゝ後勝ゆも負
ゆもかゝハゝのりゝ一戦遊ゝまを此川を墓所よあさ
るゞゝ後と眼よ角を立申後へゞ諸大将手を打て扱々

尤至極なりとそのく云ふ及ばずして江土川をうへ大利を
得らるたるうへ大阪表今福合戦あると又兵廚鉄炮
ふのうり疵をさづり見る大阪も御運もまづ強きぞ我
手浅しと云うそぞ

○関が原御陣起り候えば慶長五年七月　家康公秀忠
公數万ゐて會津へ御發向あるを候ハ景勝上洛うと
そうとそ香指原より新城をとり立諸浪人を集め道橋を
修理し竜城の用意と聞し召御退治のうめ此のごと
景勝大ふ驚き香推げ原新城ハ直江山城守上意得て公儀
済うる上なり又在国ハ秀吉公御在世の御り五年在国
の御いうま済うる所なり然ども押付て御征伐も有

候ハ弓矢そる身のなうひ一矢仕るべうそて百三十万石
の諸侍のうらび呼集め洞菩提所雲洞院と謙信御影堂
毘沙門堂より於て一紙の起請文を書せ妻子を會津の城へ
籠ロ々ふ焼草を込を紀景勝ハ家老物頭をあつめ會津ハ
七口あり殊より芽多南山口ハ會津を見下し中々篭城なる
所ふてなし　家康公御父子白川口ふ着陣候ハば逆寄
ふ仕かけ野合の一戦をとげ勝候ばあとを追て江戸
ハ扨おき都近切て登るべし頁候ハば士卒もろとも白川
を扰ふうて討死仕るべく候下野と奥州の境白坂より白
川まで二里の間草竜が原と云所のうより紀戦場なるべ竹
木を切うけ地形をきり平け白石城を大手の一の木戸と

一番合戦ハ安田上総介一万三千余二番合戦ハ島津豊
下齋二万七千余白川の城ヨ籠リ　家康公御父子御着
陣彼りぐ草篭村へ押出し一戦し若勝ごゞ白川の城へ引
あり四方の人數同枕ヨ討死を可遂とさゞめ士卒上下
逢維子血脉を頭ヨかけうつゝ　家康公を待うけ彼景
勝只一騎背炙南山口の嶺ヨのぞり長沼の地形を見て夫
より樵夫を案内者ふして山中を通り白川口境の明神ふ
うつり人數押の道を見積り密ヨ了簡を定め彼ハ
家康公白川の城を攻らゞ彼所を長沼より兼て見置山中
を人數を引つゞ境の明神ヨうつり　家康公陣取の後
へ出旗本へ切てかゝゞ手詰の勝負を可決とつゝり置き

彼上杉家中ふたゞも知ものなし近日　家康公御着
陣御先手榊原式部太輔康政さゞでふ大田原ヨ着大田原さ
白川より一日路なり景勝さゞを聞て八千余を召つゞ
ひさゝに會津を出南山背炙をさゝへ此山を背ふ當て長
沼陣取　家康公白川表へ御着御一戦彼りぐ山中を推
着思ひもよらぬ後へ廻り　家康公御旗本へ切てかゝ
ゞ申べき覚悟まて陣ぞり彼八千ハあさり小勢ヨ彼と
家老ども異見仕り彼へども謙信已來の吉例さて承引無
之直江齋藤千坂等申彼ハ謙信公御代の古兵ども過半死
失物ちゞる人數八千ハいぐふ彼と申彼景勝ハ勝利
を得バ八千ふ不過彼へども皆々申所余義ふしさて許容

有是より千坂齋藤新津三室寺等三万ゆく長沼合き
たり候へども景勝さしづゆく三里のとを陣とり候若
家康公白川へ御着陣候ゆく御大事なる罷なるべく候所ゆ
上方ゆく治部少輔をちぐえ五幾内西国一圓ゆ乱を伏見
へとりかゝを候由　家康公小山より江戸へ御帰城なるを
候ゆ景勝手立相違仕候若白川城御攻なるを候とゆ景
勝八千ゆて御後より不意を仕かけ候ゆ御ゆんど御一
代の御大事なるべきゆ御運つよき御大将とその
已後とり沙汰仕り候右の通りゆ景勝も會津へ引入申
それ候

○秀吉尾張ゆ発ゆて信雄　源君を征せんとゆ先泉州岸

和田の城中村式部少輔一氏を篭置紀州の根來雑賀の一
揆を押ゆむ信雄密ゆ根來雑賀の一揆をちゆんて秀吉大
阪を発せむ必その跡を責て秀吉の巣穴を破るとゆゆ
らるべ一揆等同意ゆて天正十二年三月十八日二万計海
陸ゆ分て堺の浦へ働出て大坂の空虚を襲んとす一氏下
知ゆて大敵なり容易ゆ戦ゆ尾張也の御戦ゆ害ゆくべ
ゆゆ一人も不出泉州の国侍ゆ真鍋五郎右衛門貞成此時
号次郎俊成号主馬大夫十七歳一氏従ゆ城中ゆ有ゆ一氏ゆ乞て一
揆船手を働と見へ候某在所大津ゆ家人の妻子を差置候
へば参て片付候べやと申ゆゆ一氏尤ありとて許之真
鍋手勢百卅餘ゆて大津ゆかゝるべ舟手の一揆大津を差

て押來る大津の混乱不斜留守ホのうりうるものぞも
昔小城の有し跡も妻子を連行戸板畳なぞあて囲ふ所
へ真鍋出來まば少も安心すといへども一揆八千余騎味
方八百余對當すべきふひのらざまば士卒危ミ恐まて敗
走の機有真鍋ガ与力ホ秋山亦之丞と号する大剛の勇士
有其已前一日ホ鑓を七度合うる程の覚ある者あり真鍋ホ
向てかやうある時節ガ肝要なり大将の心うろうへる敗
ハ士卒役ヨ不立のあるよくく合点ありて下知せら
まよと云真鍋それ仕形ハ如何秋山ガ曰今の仕形三ツ有
第一ハ妻子を古城へとり籠め城ヨ拠て戦ふ第二ハ
妻子を堺の津へ退けて我々ハ真丸ホうり囲をつき破り

岸和田へ駈入う第三ハ妻子を連て堺の津へ退くう此三
ツより外あるくと云真鍋盃の緒をあめなりう三ツの謀上
中下ハ如何秋山ガ曰その一ハ上其二ハ中第三ハ下なり
真鍋ホからば妻子のうそも古城ヨ拠て戦ふ謀を用ひん
秋山聞て左のらば一人ものらば撃死そうし不苦や真
鍋ガ足をふく刀を抜て金打し愛宕八幡うにて討死を
べしそうと言て思切うる有さまなり士卒是ヨ励まされて
必死を思定めうる体なり真鍋海上を見やまば敵舟已
ホ近付うり敵ハ十倍の勢なり取巻まてハ叶まじ迎戦
てうそうそ濱手ホ出て備を設く田賀井別齋秋山又之丞
下知くく敵の舟より半上る所を鉄炮を打立られハ敵

兵打挫られてかゝる處を真鍋白旗を振て先隊
八十余騎小松原より突かゝる真鍋が兵田賀井左吉右衛
門一番鑓合一揆を追立る惣軍乱討て一揆を海へ追浸て
討取數多くゆゝしく返し來る敵をば真鍋が兵波防の芝
手より弓鉄炮を伏て打立々々防られば敵舟さんざんに乱て
遥の沖より引退きあくまで可寄氣色もなく一氏は真鍋が働
如何と思ひ蜂須賀小六家政後阿波守蓬庵と称す二千餘騎差そへ
て迎に遣しければ真鍋は思ふまゝに勝利を得て妻子を
引つれ蜂須賀と打つれて岸の和田に引ぬ

○朝鮮の役に加藤清政の陣所糠あるくに馬を飼に苦むあ
まり清正聞て糠あるくば藁を細く切り大豆に交て飼
へと云ければ諸士如教くて馬に能食くて苦むてはし
近世明暦年中江戸大火に依て人馬の食乏く御旗本の
士新庄内藏助古老の士聞くるて有て稲の苅禿を堀
泥を洗去て飼ものるに馬の力落ざるを得たり

○慶長十五年の春参河田原にて秀忠公田猟を催され本多
中務太輔九鬼図書と仰に依て御旗本あくに見物せらるる図
書忠勝に向て勢子凡六万も可有やと申られで忠勝夫迄
いあらじ四万二三千も過べくと申る図書某見る処
に縣隔なる違ありと心得ざる顔色なり忠勝の曰られ
ば高山より平原へ押並くる人數は小勢も多く見へ谷に
集りくる人數を山上より見れば多勢も小勢に見ゆる物

小俵あるを以打見るる処い五万餘と存俵へぞもひろくて
積り俵〻答へられきぬ
○細川家い足軽の鉄炮口薬入革ゐて鼻紙袋のごゝ〻縫用ゐ
夏の急なるそれよ至て指を以て捻入よ利有といふ
○豊臣秀吉い智謀のゝゐゐらず天運ゐ乗じ〻る人なり
織田信孝岐阜の城よ拠て秀吉を拒むあるを柴田勝家と約
〻秀吉岐阜を責い我柳瀬より出て秀吉を挾討んと
謀る処なり秀吉あるをきゝ已よ岐阜を囲んとする
前夜甚雨有て呂久江戸の河水激浪滔々〻れば渡るて
ゐゝゐび川の此方よ陣を勝家柳瀬よ出るを秀吉岐阜
をすゝ〻柳ゞ瀬よ向ふ洪水の故よ信孝尾撃するて不

能勝家の謀い却て不意ゐ遇ふ端とるり又甚雨洪水い秀
吉をきゝゐるにあらるにや後小田原の城を囲それ城南
の海上い海賊九鬼大隅守をして兵船をのり廻し囲の手
を合せむ攻城の間五十余日一日も東風なゝ若東風
ゐるを舟を置て成めそれ処なり其後小田原の海上東
風なれ日い上様日和と云ならいせり
○源君あるそれの戦よ久世三四郎坂部三十郎を遣し敵合
の様子を被令見両士御前を立それよ坂部い顔色勇進〻
る体よて退出て久世い顔色不快その品悪し御前ゐ
居られるる御姓の中ゐ久世ゞ体を笑ふ人あり　源君
御扈従の方ゐ向るせゐひ坂部い生得の剛者なり此故ゐ

敵を何ぞも不思議と心を労するとて久世い生得坂部ゟ不及然ども勤励て武勇を働かんと思ふ故ゆも様子二方あらゝ生て有まゝと覚悟するゆへ心を労ひり今見よ久世い坂部より二三町もふの〳〵働能見届て可帰〇ぞゝ仰らる無程両人帰来坂部より久世四町計先達て能見届て敵のゆうすを申上る　源君そのゝち右の両士を評して久世い心ゟ剛を知て生得の剛有ものゟ不劣と励むゆへそれ働一際踊ゟ見る處有て奥ふゝ彼ゟ武功いつゝも成易ゆへと覚られい怠意ひりて不錬處ありと仰らる品晋ゟれとも是ゟ同しゆへ有観世左近い謡ゟ名を得るゆふゝ剃髪して安休と号

を人ゟ語て謡ゟ三病有声の能と覚のゆへと拍子の能きゝるゝと此三支備るゆへ多くい謡ゟ不成して止むゆへ番用をたのむひりのゟ自満りとす此をもつて工風不積功労を不重い諸藝の奥意を知らざるをひり

〇秀吉黒田如水を召て豊前国ゟ封ぜらる日隈の城ゟ一揆あり如水の嗣子甲斐守長政兵を発して攻亡しそれ外所所の戦ゟ利を得て武威廣大なり然ども紀伊谷の紀伊弥三郎鎮房のゝ不従それ勇畧遅きゝと等倫なる人なし長政是を攻んと望まるゝとそれも如水不許之長政本意なれとて思い如水ゟ忍び密ゟ紀伊谷へ取懸りて責之紀伊ゞ兵勢盛んゆへて長政の士大ふ破まて討るゝもの数を不

知長政馬を深田へ乗落して鞍爪まで泥に沉こそせんなし
長政が馬は大竜寺にて九郎一の名馬なり長政今
あの馬を捨ハ敵に奪ハるゝことを口惜く思ひ捨兼ねる
所へ菅和泉守政利見て我馬を長政に進めて行歩立に成
て引んとを長政菅が馬に乗り大竜寺を敵に奪れるを
甚恥辱なりと引上て来たりて退かる菅ハ跡にのこりて
さぬ〳〵とされども大尺なる馬の深泥に没しぬまゞ如
何ともなりがたく菅今ハせん方なく片々の鐙をもづし
持かゝり隨分と存秘術を尽し候へども七八人の力なら
でも難揚候ゆへ鐙を片々取帰候てなく出しなゝび長政能
計ひぬと感ぜられしなり如此證なれとも敵に奪ひ取
られしなりと人の疑を得るものなるべかく計ひて虚説
の譏なりしまんが為なり

○加藤清正の士ある城乗に金の尉斗付の大小をさ
して塀をこゆる後ろなる尻を押上るものなり我を押
上るよゝ思ひ乗上り後に見なべ尉斗付のさやを切廻
して金を取られなり人なる油断なりと沙汰を清正
が曰城乗を心なして後ろを顧ざるハ勇士なり但金の
付を指さるハ若輩の故なり戦場へさやうの美麗
なるものをば用ひざるを不知と覚る末なり
若者なりとなるべしなり或陣に野陣して昼弁当を
遣ふ或児小姓腰兵粮を不帯その伯父焼食を分ち与ふ

清正これを見て少年の花車風流もそれとよまれ陣中に
て兵粮を持ざるハ武備に怠まつり過代に馬を取上げし
さて衆馬を取上伯父若年のまゝに心を付て教ゆべきに
武備不令励科甥に同さて是も馬を取上られ
○直江長谷堂を責るとき義元加勢を伊達政宗に乞石川弥
兵衛に兵衆二千余騎をさしそへて遣を石川兵を三手に
分て長谷堂に趣く戦に及で最上勢石川が兵を上杉勢と
見違て味方討に遭ること多し石川始我一隊の相印を最上
方へ志らせざりしが故なり援兵にさきたつい先相印
を示し制禁を問て定まる軍の法にて知慮あるも及ざる
ことなり然るに石川拙して無益の兵衆を亡まつり

○赤井悪右衛門ハ本小身の士なりしが武略を以て漸盛に
なりてのち丹波半国を領せ但馬比賀美に一将有二万石
なりのち驍勇にして志ろしめす要害の地を前に當て拒ぐべ
赤井攻ぎるも利あしび赤井古への兵書を讀に地を攻て
人を攻ずと云語ありは是に心を得て彼勇将を要害の地に
誘おびき出し一戦に大勝して其首を斬その地を取
○勝負の理少しの競ひ後にあり長久手の役に　源君討勝
玉へば秀吉の師おそるゝ色あり秀吉衆を督ひて出て戦
人と勇め立らきそびて衆奮激の氣を生ぜ　源君の兵
秀吉の用ふ餘る大軍を見て驚きゝる體あり　源君明
日軍中に令して馬揃をして玉へば味方敵を呑の心を起良

将のもとる所知んをべし

○大阪夏御陣五月五日のあさ真田左衛門佐幸村ゞ物見馳
帰りて旗三四十本人衆二三万計国府越より此方へ越来
り候と告是伊達陸奥守政宗の軍勢ゞ真田ゞ士卒すら
や此陣を押出し玉ふうと勇む氣色なりしを障子を
靠片膝を立て居らるゞ静に答て左あらんと斗ゞ
外に言ゞを出さるゞ午の刻計まで物見馳来り今朝のと
ハ旗色かゝり候ゝ二三本見へ人數二万斗松うげ故不分
明候ゞ竜田越を押下候と告是松平上総守忠輝なり幸
村虚眠して居らるゞ目を開きよし〳〵如何程もこせ
よ一所に集て討らべ心地よからんものをと是ゞ取

合ぬ有りしを皆早りぶる心も稍静りぬ是大
敵を不令恐味方を騒ゞ先ざるとのことあるべし夕欽然
てのち此備所ハ戦に便あしゝゞ敵近く寄らんそれ一万
五千余正奇を不乱前後を不混騎歩次第をそのゝ押出
せゞ敵假令十倍なりとも恐るゝ不足と思ふ是其
夜道明寺表に陣をとり明るゞ六日の早且野村辺ふ至る
渡辺内藏助紀ハ幸村に先達て水野日向守勝成とたゝかふ
紀ハ勝成を切靠るゝ五六十歩勝成又守返て紀を衝
退る互に刀劔三度に及で紀ハ深手を蒙り脇に備を引取
そもそも立直し幸村へ使を以て只今の迫合に疵を蒙候
故御人數駈引の妨と存脇に引取候且横を討んとする勢

を見せ候へば味方の一助とならんと申遣を幸村御働目を驚候是より我等受取候と答ふ備を進むるを正宗の麾勢蒐り来る野の地形前後い岡なく上平なり中間十丁ばかりひきなして道左右田畷より連なり幸村已に兵を前んとするに及び令を下して曽を着せず鑓を取せば馬の傍にひき添せて下知せんと及び待せなり敵合十町斗に成りて及び幸村使番を以て曽を着せよと云爰に於て皆ありて及び曽を取て打着忍の緒を締めなりて及び勇勢を持せ置なる曽を取て新に加り兵氣さかんなり盛なり敵合已に一町斗に成らんと思ふに及び幸村又使番を以て鑓を取よと云ふ諸士手々に鑓を取て穂先を敵方に差向て及び面々いなる堅陣

剛敵なりとも打砕んと別に魂を入るがごとく此に及び幸村が先手半過岡の上に押上なる處に正宗の騎馬鉄炮八百挺を先手より一二町も前で一同に打立て鉛子の飛ハ如電火薬光電に似て煙の忽雲霞となりて丈尺の間も見へずして幸村先手の士混々と打斃されて死傷なるもの多かりしかども一足も退心のなりしが曽を着鑓を取なる氣勢の壮なるが故なり幸村煙の中に先手に爰をなるに大事の場で片足も引ば全く可没と下知なる声耳に微し鑓の柄をかぐり平伏なるなりて行居敷炮声の絶間に十四五間かごづく走なりて幸村下知して炮声の絶間に十四五間かごづく走行居敷炮声の絶間に如斯なるに及び幸村が鑓に及

より一尺進むるものならば今日第一の功とせんと言
へ一人も此先に出るものなし政宗の騎馬鉄炮と云
ハ伊達家の士の二男三男壮力のものを擇て本より仙
臺ハ馬所なり駿足を勝りのせ奥羽ふく所々の戦ふ馬上
より鉄炮一放と定て打すゝふ不中玉ハ希なり打立らま
て備乱るゝ処を煙の下より直に乗込で駈散すふ馬蹄ふ
蹂躙せられて敵敗潰せずと云ことなし此ゝ紀騎馬鉄炮
の士馬を入んと駈寄ゝ多まども幸村の先鋒近々と備へく
折敷ゝりと見るく漂ふ所に煙も稍薄くなるまべ幸村此あ
合をゝや計ゝん大音上再拜を振て蒐まと言ふ言の下に
ゝ多起立て直に突かゝる政宗の先手七八町追崩せり

水野日向守勝成正宗をすゝんで復戦ハしむ政宗我軍さ
労まゝの戦今日に限るべゝ[illegible]ちて不後勝成すゝ忠輝
を勇まども不果勝成ハ小勢なまべ獨ゝ[illegible]ゝて不能
ゝて止ぬ幸村未の刻迄合戦を待居ゝ[illegible]ゝ夫より繰引
ふ引ゝまゝり其体粛然ゝて追討ゝて不能慕りゝ却て為
彼ふ可被挫東軍の諸隊見るゝ感賞せり
○同陣五月六日木村長門守重成若江に陣す勇ハ生付ゝれ
ども陣数に不錬将なまべ持口を不堅ゝて爰ゝふ敵ゝし
敵有方に向ゝんとゝて八尾ふ[illegible]ゝ爰ふも敵ゝ[illegible]
本陣ふ歸来るゝゝ井伊掃部頭直孝の臣磐若内膳
物見ふ出て重成の備未立ざるを見て敵の虚顕俄里程つ

めて夜更に不出ハ八尾に行て今爰に可来や敵ハ道ハ疲
れ無粮を遣ん処を討バ利あるべしと使を立れバ直孝心
得ありて軍を前め藤堂和泉守高虎と首尾を交討て大
利を得たり

○同冬陣ハ越前黄門忠直の手に仕寄を付ハ夜に入て長竹
を以て付寄るに城中より鉄炮高く打出して士卒一人も
不傷是石川數馬が方なる処なり人誉或老士ハ是を聞て
城中の鉄炮ハ昼能々しらめ込土俵を以て究竟なれハ闇夜
といへども外るて不多もれり城兵ハ是を不知して
石川が名をなせるのみたりと云き

○信玄の士小幡豊後何の戦より敵地ゆく物見に出たりし
が帰路を敵に取切られたり豊後猶静ハ敵合の様子を見
終て帰らんとせるに敵兵追之豊後初通たる道より
遥脱に在し池へのり込馳帰て敵の虚在と申せバ信玄
則兵を前て利を得られたり伊達政宗の士茂庭周防或
ハ物見に出て伏兵に囲まれて討死を不逃走ハ茂庭が
勇なりと誉るものあり或人聞て物見ハ敵を見て引
取ことあるべしハ伏俵ハ軍の勝敗の掛る重任也
あるを誉るハ其ハ道を不解故なりと云云

○肥前島原の役ハ賊ハ有馬の古城に拠て守城を寄手の諸
将長手の門に付て責るに賊門をひらき突出たり敵ハ
高陽の地利ハ依て寄手を少し押立たりあの時寺沢兵

庫頭の旗奉行山路将監百石兼てより旗差ふ令し道端ふ生茂りたる木を令取付ていろ〻あるゝことのりたるも此木を放べ〻〻堅く根へ〻居よと令置るゝ中〻崩かゝふ勢ふ押立らるゝ他の備ハ敗軍ふ押立らるゝて旗色靡乱〻れぞ〻も寺沢の手の〻〻全きてゝを得〻〻り

○松倉長門守勝家ハ島原肥前の国則勝家領之の賊のてゝに依て身上滅亡せり勝家の士飯村助兵衛と云もの浪々〻〻〻藝州廣島松平安藝守光盛の城下ゝ来る廣島の諸士島原のことを尋聞く或ゝ〻天野半之助飯村ゝ城中より長〻の手へ夜討いたゝ〻りしやと問飯村答てその儀なり松倉家ハその備ゝ厳ふ〻て雲火を投外聞を出し夜打ゝ〻ん思ひよらずと云天野笑て長〻の家も未ゝなりてゝ〻意を解ゝる人たゝ〻りしふや古老の士あらば左ハあ〻ゝ〻夜討のゝ〻ゝ〻ゝて〻ゝて大利ハ有べ〻〻と云へり天野ハ始　源君の御扈従なり中根左源太と号し傍輩の士と口論〻て出奔し後大阪の役道明寺口ゝて松倉豊後守重正ふ属し働功有〻〻ゝ〻ば御勘氣を許され浅野但馬守長盛ゝ仕禄二千石光盛の代迄奉仕せり

○同陣二月廿一日の夜城中より黒田右衛門佐忠之鍋島信茂寺沢兵庫頭の三手へ夜討を寄手數輩討死し鍋島の手を竹策井樓をや〻〻拂ひ賊の勢甚強〻と注進有〻〻ゝで江戸御城へ尾〻紀〻水戸の三家其外在府の諸将を召〻

ゝまとバ　ゝるおまを聞て驚色あり紀伊亜相頼宣卿のゝ近
日落城ゝべし鍋島家の井楼ゝ火をかけ〳〵様子城中知
畧のゝけおまゝゝり心を労すゝ不足久うゝずして吉左
右あらんと仰られゝるぶ程なく落城の告有しゝべ人
皆頼宣卿の明察を感じゝゝゝり

○大阪の役ゝ　源君渡辺圖書ゝ加列の陣場を見て叅ゝ
ゝゝ御使ゝ遣ゝる渡辺竹東の竹一本抜て三尺二寸五分
ゝ切隍際ゝでの間を打て委細ゝ言上ゝ城より矢玉を飛
ゝれども不中後ゝ　源君ゝ力三十騎同心百人をあづ
け玉へり

○寛永十四年肥及島原の賊ゝりしゝゝ寺沢兵庫頭の士
賊と河内浦ゝ打くゝる寺沢家の鉄炮の将足軽を下知し
搏ゝゝゝ立ゝゝ令搏ゝ悉北走ゝ偶搏放せゝゝも敵を
恐まゝて面を上ゝ俯搏ゝ鉛子ハ虚空ゝゝんで賊ゝ不中
並河九兵衛ハ足軽を下敷せ膝架ゝて打せゝ一人も
不得退隊不乱俯て放せゝも鉛子不高しゝ他の足軽の搏
しハ異なりゝまゝ定ゝ死法ゝして左のゝ奇策といふ
ゝあらず大阪落城元和元年ゝりゝのゝゝ迄年月相去
ゝ廿三年の間ゝ武支ゝ疎かしゝて如此況や叅
平已ゝ百有余年常ゝ見を論じ是を習ゝも或ハ其傳亡
其理を違ゝ未迷ひゝれて不能必しも由ゝせゝすべ
からゝ

○同賊在馬の城ゟ撓り諸将囲責るゝ賊強く寄手利あらず上使板倉内膳正討死の〳〵ち松平伊豆守信綱の下知そゝ責ゟ止め竹策を付寄囲て數重只かゝゞ変を待不戦件助右衛門と号る浪士黒田右衛門佐忠之の備を借て居そゝ永陣の間諸人氣力つゝ勇氣も脱怠を件ゟ昼夜物具を不脱鑿を拔そゝ臥る程ゟ相陣の者目悟ゝ紅てゟとゝ〳〵なゞら今此大軍ゟ被囲竹策鹿垣の内ゟ込らるゝ賊徒多く切そゝり共物具を着る隙ゟき軍やあるべき余り心がけをゞて精根つゝ多ゞ城中糧尽て死狂の軍ゟゝ何の用ゟも立べゝゞと云合り翌年二月廿一日の夜賊黒田の手へ夜討を一揆の勢千百人芦塚忠兵衛布津村代右衛門大将分ゟ〳〵押寄そゝり何ゟの陣も思ひゝらゞ周章不斜上を下へ混乱を件ゟのゝより甲冑を着〳〵鑓を放さゞ有ゝゞゞ一番ゟ走り出竹策を破り押入敵を突伏〳〵二人討そゝり此ゝ紅未ゞ味うゝゝ一人も来らゞ賊柵越ゟ件ゞ右の腰車をつゝ其鑓を握て引取〳〵呼ゟ又一人件ゞ左の股を突ゞ是をも奪ひそゝり鑓二本なゞら得そゝり〳〵ども腰の疵痛手ゟ〳〵立揚るゝゝ叫ゞ既ゟ討そゝるべき處ゟ黒田家の老臣黒田監物ゞ人數進み来て敵を追そゝる間ゟ件ゞ僕肩ゟかつゝ小屋ゟかつる同廿八日落城ゟゝ件の疵を痛て手ゟ不合後平愈ぢ〳〵ゝゞ忠之件ゟ禄八百石與へらる件辞て臣ゝ先知之く且武功

そもそも一偶此度御恩ふ〻く御備の端を被差置少々疵を蒙るまでの操有て過分の禄を賜ふて身の幸甚しとい〻ども手疵深手ゆへ未愈自由の働心元なく彼へども自然以後御用有らんそれ役ふ可立やそれ段計がく御免を可蒙彼と云忠之怒て彼が心中知高不足と思へるあらん我陣を借て出陣せ〻上へ我家人あり臣〻〻主命を背く罪軽からず彼が言へ理有て實あし然ども武功ふ對存分を止るのみ他家へ仕へく士職を有てを許さずそく追出されそり程経て江戸殿中ふて水戸黄門頼房卿忠之ふ向ひ我大望ゆり叶へらるべきや否やと仰らる黒田何事ゆも承り彼らんと諾せらる頼房卿笑ふく先々令満足彼と謝し別儀ふあらば伴助右衛門と申浪人足下構あるよし是を許されれ彼へと仰らる忠久辞とそれ術なく〻諾を依之伴ハ水戸家へ仕へ禄二千石足軽三十人預まり

○同落城の砌細川家の足軽陣佐左衛門と言のち二の丸ち辺ふく鉄炮ゆ中そり死そる者の首をそりて數首の中へ入置そり忠利前髪付そる首ハ別の所へ并べ置べしと令そ類を分ち忠利鞭を以て陣ゲ得そる首を差示し若此首賊将四郎ゲ首ども言べ死のちそり見知そる者ハなれやと有それ須佐美権之照見知彼とのふ則呼て見せらる須佐美能見届けく四ケ年以前四郎を半年計召仕彼依之能見覚彼第一の印ゆ左の耳の側ゆ瘤あり是可疑ゆなく

四郎が首ありと云然らばそを生捕うる四郎が母を呼て見せるに一目見て落涙し我子四郎が首なりと申忠利則軍鑑畑忠庵を呼て大将の首に髪の結様替有と聞く其通り也畑答て如命大体常の如く浩て髪の折を下へ折彼と申せば忠利下部の者に令して首の髪を令浩仲間馬槍拘る水を入来件のごとく浩終りて忠利使者を以て石谷十蔵へ此首大将四郎が首に似彼故先進彼尤不慥猶又御吟味可有歟と申送られば十蔵則使者に對面あり吟味の趣を聞届て上に訴てこれを去るべし猶やがて生捕る可尋とて數人別々に引分て向へ皆四郎が首なりとて十蔵も上使信綱も相共に忠利の陣に來り手柄を被賀飛撤を以て江戸へ注進有陣にあり功に依て新知千石與へらるべし

○摂津半国の主松山新介が勇將中村新兵衛度々の手柄を顕すべき時の人見を鑓中村と号して武者の棟梁とす服折に猩々緋鑿に唐冠金襴なり敵あるを見てそそや例の猩々皮に唐冠よりて未戦にぞる先に敗して敢てひっひちぐるもれる或人強て所望して中村與えるとも後戦場にのぞく敵中村が服折を盛とを不見故に競ひかりて切崩す中村戈を振て敵をころして許多なるぞ中村を知ざれむ敵恐るべし中村つひに戦没す依之曰敵を殺の多を以て勝に非ず威を輝して氣を奪勢を撓すの理

を曉るべし

○大阪陣のとき平野村に失火ありて旗本の面々馳聚る安藤治右衛門後まとり皆問如何我等は先手を心もとなく存行向て見て参り候とて可参を旗本は別支なるべしと若変ならば先手なりと思ひ馳行候故往還を退きて遅参に及び候とのへば皆その心がけを稱せ

○大阪冬陣に松平武蔵守利隆は神尚寄の軍に第左衛門督忠継は尼崎の軍に矢野兵庫佐分利九之丞を物見として蜆江の地形を覘しむ二士飯て両方沼の前狹く末廣く身方の為よい利鮮く敵の為よい便ありと申すまゝ由井伊豆丸山豊後渡瀬渋路を差遣を三士は却て味方の利あらんと云忠継矢野佐分利が言と相違するを以てそれ故を問るに三士君公人數を推出させ玉ふを合戦を望ませらるゝか非や身方大軍なる成見て敵地の利なれとき必怖て出べうしば君公合戦を挑まゝも得べうんや敵地の利を頼みて出を處を身方は大軍なり長々と出させて後急に討之勝ことはんの内に候若人數を向らきば早きを善とす利隆公の備へ流候ば敵見をかゝて未戦なるそれに引返し候んと申せば忠継汝等が云所尤なりとて造作もかゝ敵を追拂なる利隆は見之勇を進むとのへども目付城和泉守永盛　源君の命分と云て強て制之利隆憤り抑て兵を牧んや否やと思惟

する處に阿部四郎五郎諸手を巡てあく小來る利隆ちの
由を告らるゝに阿部兄弟の身と云眼前の敵といふ忠継
若し不克バ是兄弟を棄てゝ忠継又克之い是自性の
そしをを取るあり両なゞら武家の恥辱なるべ只進に不
如と云一言小力を得て永盛制すれども不用利隆の將利
隆始より戒のらば何をう戒て沮止らゝや敵を見なゞ
ら郤て兵を收い師を起して此に來るゝ何の為とのす
る　源君決し如此の非理の命あるべゝと云永
盛齒をゝ小躍して汝等吾言を軽蔑さてその罪重し必言
上を遂て一々腹切せんぞと大に怒る利隆の將勿論のて
なり士るゝ其君の為小腹切んてゝ本より所甘也

て中津川を渉りて横すぢゝ小蕙る敵の兵勢を見
て中途より引入て合戦に不及大阪没落の後利隆懐携貳
両陣の中に居て主客の勝負を料る是弱を扶て強を快せ
んとをるゝなりと讒言に遇て　源君利隆を譴責せ
らるべきの沙汰あり利隆番大膳を以て毫重も不忠の志
非義のてなし皆永盛が所為なるてを陣ぜらる番い厳
養の卒より経のあり騎士の將と為て政を預聞程のゝ
なり始終少も不蹶弁舌審小子細をのべゝ　源君も
じ免簾を隔て利隆が何をう陳ぜんと怒らせ玉ひゝる番
が言ふ所理明う小證正しゝて疑ひゝべゝ解られば簾の
外小出ゝせ玉ひゝ段々聞ゝ召届けらるぬ以後を慎めゝ

上意なり番頭を畳ゝ付て拜〳〵て不立本多佐渡守正信御
前ゝ在て罷立て黍上意なり飯て此旨申聞せよと仰りけ
るゝ番猶不立正信事済て不起ゝ故仰るゝと被尋其時
少し頭を上正信の方を見て憚多き申ごとゝ侯べゝ以後も
慎めゝの上意を利隆ゞ誤る紀段未聞食届けられざる處
有ゝと存侯是より先まかゝて過ち即坐ゝ侯へべ以後ゝ
亦只今の通ゝ侯別ゝ可慎のて侯らずと申　源君重〳〵已
利隆の誤るきことを知給り更ゝ殿を不遣ゝの仰ありそ
ゝ紀頓首再拜〳〵て飯る正信以下座ゝ居る人々大ゝ番を
嘆美せり

常山紀談拾遺巻之四　大尾

国立公文書館
National Archives of Japan